

記者会見—日本外国特派員協会にて—

阪神・淡路大震災から平成10年1月17日で3年が経過し、改めてその影響の大きさを痛感しますが、そんな折しも1月12日、東京・有楽町の日本外国特派員協会で、最近の地震研究の状況や東海地震に関する観測の状況などについて、説明を行いました。

同協会は外国人記者などが、日本で取材活動を円滑に行うために設立された組織で、話題の人物を招いて会見などを行っています。

当日は、AP通信社など16社の出席があり、記者からは「東海地震は発生に向かって中期的前兆活動に入ったと

言われるが、短期的前兆活動として何が起こるのか」といった鋭い質問もあり、この問題に対する関心の高さを知りました。

(問い合わせ先：管理部企画課)



谷垣科学技術庁長官が視察

平成10年2月12日、谷垣禎一国土大臣科学技術庁長官が視察のため来所しました。



関東・東海地域の高感度地震観測網について説明
左から2人目が谷垣大臣

地震の調査研究を行っている施設や最先端のスーパーコンピュータなどを視察し、特に大型耐震実験施設では、実際に振動台に乗って、神戸海洋気象台が観測した阪神・淡路大震災の揺れを体験しました。

手すりにつかまっていたものの、グラッとした後で「いきなりこの揺れがきたらびっくりするなあ」とやや緊張した様子でした。

(問い合わせ先：管理部企画課)